

父の原爆記

(中学生になった息子に贈る戦争体験談)

久留米市 砂入 和夫

あの朝……昭和20年8月6日は、よく晴れた夏の朝だった。ちょうど今の君達と同じ年頃だった僕は、広島市から西に10km余り郊外の廿日市という町の中学1年生だった。

朝礼が終わって教室で席に腰を下ろしてほんの少したった時、あの運命の瞬間はやって来た。幾つものフラッシュを一度に点火したように、突然強烈なせん光が走り、教室中の机や黒板や友達の姿などを浮き彫りにした。

一体何が起こったのかと、一瞬みんなが息をのんだ。廊下の向こうの広島市上空に顔を向けていた友達の一人が、そこに浮かんだ小さな白い煙のかたまりを指さしたのをきっかけに、皆一斉に廊下に走り窓に身体を乗り出して、それを見つめていた。最初は、青く澄んだ夏の空に神様が気まぐれに吐き出した白い痰のように見えていたものは、次第に密度を増しながら空の一角で大きく広がりはじめた。いつの間にかどす黒い色に変わった煙と、毒々しい赤い炎とが混り合い、ちょうど脳髓の模型のような形がかたまりの中でせりあっていて、うごめきながら無気味に成長するのだった。

せん光から1分くらいして、すざましい爆発音と爆風が辺りを揺るがせた。窓ガラスは粉々に飛び散り、僕達は、訓練で教わっていたやり方で目と耳を指で押さえてあわてて廊下に身体を伏せていた。自分の意志でその姿勢をとったのか、吹き飛ばされてそうなったのか定かでない。短い静寂が流れたあと、僕達は口々に何かわめきながら、校庭につくられた防空壕に駆け込んだのだった。

その頃、僕達がおかれていた境遇については、今と余りに違い過ぎるため一口に説明できそうもないが、とにかく物心ついたときには戦争真っ只中だったわけだから、その戦争が正しいとか間違っているとか、そんなことにいささかの疑意を感じることもなく、その時代の影響をもろに受け止めて、後で考えれば当時の大人ともまた違った、とても純粋な張りつめた心境で毎日を送っていたと思う。上級生達は武器をつくるため軍需工場に動員されていて、学校で授業を受けているのは僕達1年生だけ。校庭には軍用の無線機器らしい大きな施設がのさばっていて、その関係の軍人が20人程度校内に駐屯していた。周囲すべてが戦争を中心に回転しているなかで、いつの間にかだれもが自分自身の死の予感をはっきり認識していた中学1年生だったが……。そんな境遇の僕達でさえ、人類が初めて体験するこのような残酷な出来事が、こんなに身近なところで現実となろうとは思いつかなかった。

広島の上空いっぱいにくれあがった爆煙の巨大なかたまりの下に、いつの間にか地上から竜巻のような煙の柱が立ち上がり全体がいわゆるきのこ型の雲になってそびえ立っていた。

45分位経過しただろうか、この世のものとも思えない姿で被災した人達がトラックの荷台

いっぱいに乗せられて何台も逃れて来るのが学校の窓から見えた。地獄の底からはい出して来たとしても言うのだろうか、灰をまぶした馬鈴薯さながら全身真っ黒な異様な姿がそこにあった。

それから先は、君達が記録や資料で知っている通りのあの恐ろしい情景が、僕のこの目の前に次々に現れたわけだ。間もなくその日の授業中止が決まり急ぎ下校の途中、己斐峠を越えてぞろぞろと歩いて来る夥しい数の被災者と行きあったこと、僕自身が放射能をたっぷり含んでいるとも知らないで黒い雨を頭から足先までぐっしょりと被ったこと、我が家にたどり着いたら不思議な運の良さで無事に生きていた母と兄の姿をそこに見て安堵したことなど、生涯決して忘れることのできない一日であった。

我が家の近くに太田川の支流があって、いつもはきれいな水が流れていたが、あの日は黒い雨のせいでどす黒い濁流に変わり、ハヤなどの川魚がたくさん白い腹を見せて浮き上がっていた。後で聞いたのだが、専念寺（近くのお寺）で寝起きしていた広島市袋町小学校の疎開児童達が、こともあろうに蚊帳を網代わりにその川魚をすくって食べたのだそうだ。幼くして親と離れ淋しさと空腹にさいなまれていたあの子達。そのうちの幾人が生きている親に会えたのだろうか、またあの川魚を食べて大丈夫だったのだろうか。

あの日以来、道路のほとりに行き倒れて冷たくなっているどこの誰とも知れない人の姿を、幾つも幾つも見た。あまりに強烈な運命にうちのめされて、誰もが「生」にも「死」にも鈍感になってしまっていたとみえて、何の感動もなく死体のそばを通り過ぎていったものだ。人間としての一番大切な心のどこかが麻痺してしまっていたとしか言えない、そんな時代だったのだ、まさにあの頃は……。

心と体にすぎまじい衝撃を受けた人々は、恐ろしい体験をした場所からただ本能的に遠ざかるため足を郊外に向けた。どこへと尋ねれば「あっち」とだけ虚ろに答え、足だけひたひたと動かし続ける。何故こんな恐ろしい運命に出くわしたかを考える前に、無力な動物の本能でただひたすら逃げたのである。

小学校時代の僕の同級生で広島市内の中学校に進学した友達は、みんな死んでしまった。考えてみれば、僕が今こうして生きているのも、一つの偶然と言えるかもしれない。

原爆の悲惨な情景を見たとき、こんなことが人間の世界にあって良いはずがない、どんな理由があったとしても人道的に決して許されないと、10人が10人までそう思うに違いない。だから、二度とこのようなことが起こってはならないし起こしてはならないという至極あたりまえの素朴な思いが、世界中多くの人の心に共感されることがとても大切なことだと僕は思う。

戦後のある日、ナチス・ドイツの残酷行為が映し出される記録映画「我が闘争」を見たとき、それが自分達と全く無縁の恐ろしい人達の仕業という見方ではなく、戦争という異常な境遇は往々にして人間をまるで人間でないものに変貌させること…、その怖さを改めて思い起こし、さらに我々の血の中に潜んでいるかも知れない魔性にまで思いを巡らしたとき、まさに身震いする思いであったことをいつまでも忘れることができない。